

模擬授業参加者の 栄養士イメージに関する一考察

芦 川 修 貳

食物栄養学科教授

I 緒 言

近年わが国においては、糖尿病、心臓病、脳血管疾患および高血圧症など生活習慣病患者の増加が、国民の健康寿命の延伸を図る観点から大きな課題となっている。これら生活習慣病の発症予防と病状をコントロールするためには、適切な栄養素等の摂取や健康的な生活習慣の確立とその継続とが極めて大切なこととされ、国民運動の展開を目指して健康増進法に基づく「健康日本21」の推進や食育基本法の制定などの取り組みが行われている。

このような社会情勢の下で、生活習慣病の一次予防や二次予防さらには三次予防に従事する栄養士・管理栄養士を取り巻く環境も激しく変動している。平成12年4月7日には栄養士法の一部改正が行われ、従来からの「食物栄養学」を主体に取り扱う栄養士・管理栄養士業務から、「人間栄養学」を主体に取り扱う栄養士・管理栄養士業務への移行を視野に入れた大きな転換が図られた。特に、管理栄養士に免許される業務の第一に「傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導」が規定されるなど、人間栄養学を取り扱う専門職種としての栄養士・管理栄養士に対する社会の期待が高まっている。

このような変化は、栄養士養成にも大きな影響を及ぼしている。栄養士養成施設でもある食物栄養学科においては、栄養士法の一部改正への対応を目指して、カリキュラムの大幅な見直しを行ったところである。しかし、栄養士の業務や養成のあり方が大きく変わっていることは、食物栄養学科を志望する高校生やその父母、さらには高校の進路指導担当者に十分理解されていない状況が見受けられる。このためか極一部にはあるが、以前には認められなかった入学後間もない頃からの進路変更の申し出や、授業の内容に興味を持つことができない学生の存在が問題となっている。

食物栄養学科では、このような状況への対応策として2年前から、本学科への入学から卒業までをわかり易く解説したパンフレットを作成し、オープンキャンパスに来場した高校生や父母に提示し説明を行ったり、指定校等に送付するなど機会あるごとに栄養士業務や養成のあり方が変

わってきたことの周知に努めている。現状は、このような取り組みによって相当の効果が上がっているものと思われるが、より一層充実した内容での周知活動の必要性を感じている。

そこで昨年から、例年前期定期試験終了直後に開催されるオープンキャンパス時の模擬授業の科目として「栄養指導実習」を取り上げた。病院等医療機関の栄養指導室における栄養士業務を想定して、これから食事療法を始める糖尿病患者を対象とした集団栄養食事指導を学生によって模擬的に演じることで、高校生や父母に栄養士の業務や養成の一部を体験的に紹介するなど、適切な進路検討の参考にしていただくことを目的とした試みとしている。栄養士法には、「栄養士とは、栄養の指導に従事することを業とする者」と規定されている。模擬授業に「栄養指導実習」を取り上げたのは、栄養指導実習が人間を対象として展開されること、また、栄養指導が栄養士業務の根幹をなすものであり、栄養士養成の集大成と位置づけられる科目と考えたからである。

今回、模擬授業に参加した高校生が抱えている栄養士イメージなどを調査することによって、実施した模擬授業の自己評価とともに高校生の適切な進路選択のための情報提供手法としての効果などについて検討を試みた。

II 調査の方法など

調査の対象は、平成16年7月31日と8月1日および平成17年7月30日と31日のオープンキャンパスにおいて、各日2回の合計8回開催された模擬授業「栄養指導実習」を受講した高校生とした。

調査は、自記式によるアンケート調査とした。調査の内容は、以下に示す通りである。

- i 模擬授業参加以前の『栄養士』に対するイメージ〔複数回答〕
- ii 働いている『栄養士』の姿を見た経験の有無
- iii 働いている『栄養士』の姿を見た場所等〔複数回答〕
- iv 模擬授業参加による「栄養士」イメージの変化
- v 栄養士養成における教育内容に対する感想
- vi 「栄養指導実習」という科目に対する感想
- vii 栄養士が行う「栄養指導」に対する興味

なお、「栄養指導実習」として行った模擬授業は、教員の「事前説明」と「まとめ」に挟む形で、学生が行う糖尿病患者を対象とした「集団栄養食事指導」のシミュレーションで構成した。「集団栄養食事指導」は、下記の内容による16枚のスライドを媒体として、シミュレーションに要する時間は各回30分程度とした。栄養士役を演じた学生は、各回異なるが共通のシナリオを用いて実施した。

- i 糖尿病の病態とタイプ
- ii 糖尿病の合併症
- iii 糖尿病治療の方針
- iv 食事療法の基本

- v 食品交換表の仕組みと使い方
- vi 食事療法成功のコツ（食品および調理法の選択、献立例など）
- vii エネルギー消費量を増やす生活スタイル（運動の薦めなど）

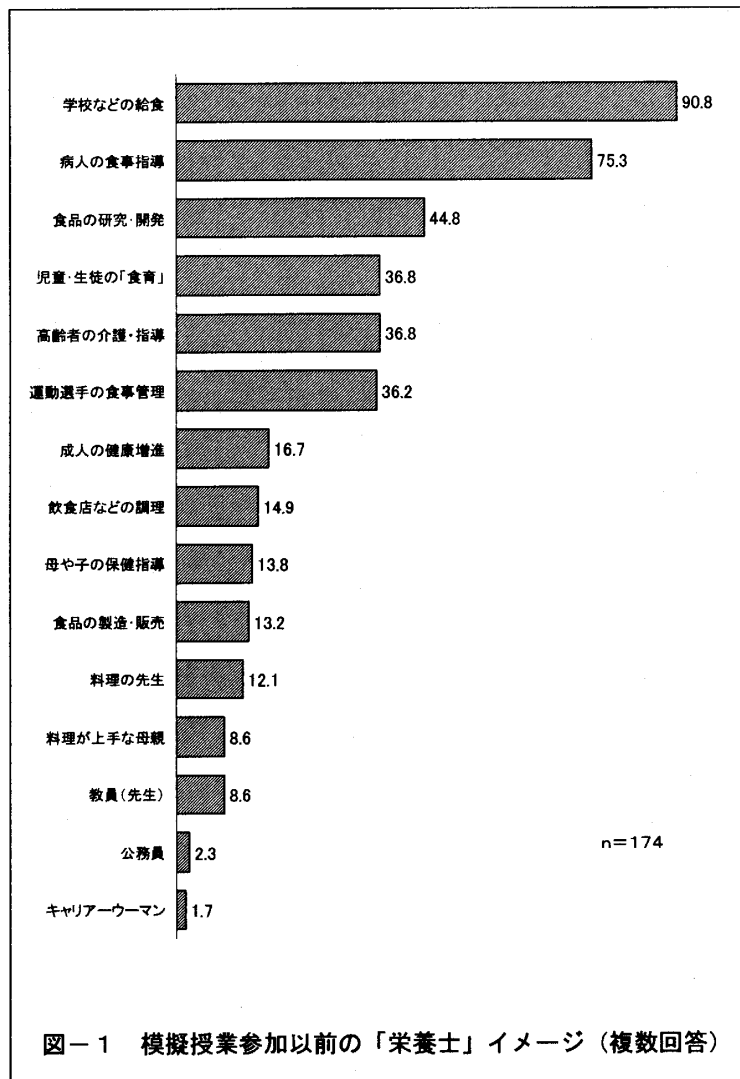
Ⅲ 結果

調査は、平成 16 年の模擬授業を受講した高校生 81 名および平成 17 年の 93 名、合計 174 名について実施し全員から回答を得た。

1 模擬授業参加以前の『栄養士』イメージについて

この設問には、174 名から延べ 714 件の回答があった。

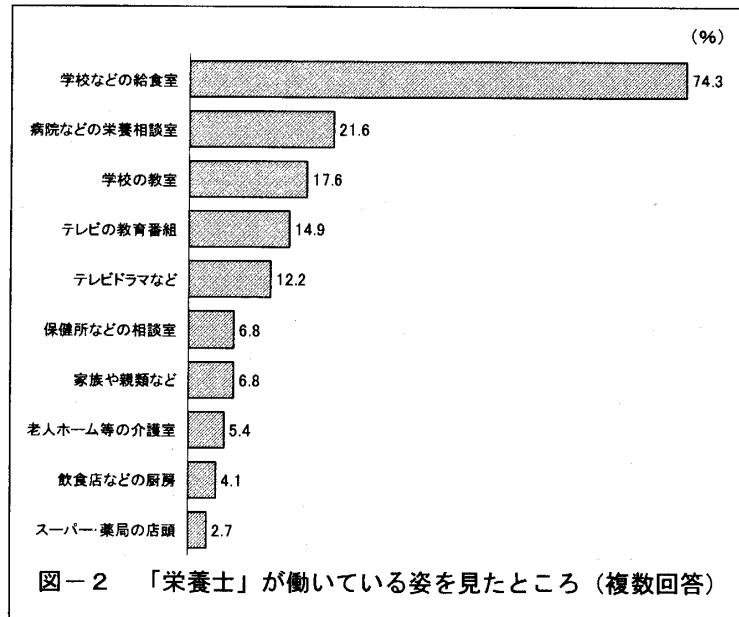
回答率もっとも高かったのは「学校などの給食」で 90%を超え、次いで「病人の食事指導」、「食品の研究・開発」、「児童・生徒の『食育』」、「高齢者の介護・指導」、「運動選手の食事管理」と続いた。一方、「キャリアウーマン」、「公務員」、「教員(先生)」および「料理の上手な母親」の回答率は 10%未満であった(図 1)。



2 『栄養士』が働いている姿をみた経験について

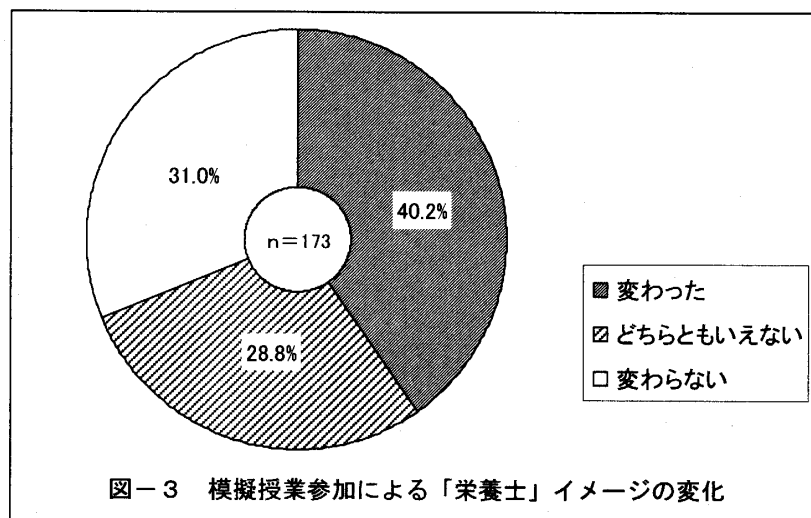
これまでに、栄養士が働いている姿をみた経験が「ある」という回答は43%であった。一方、「ない」という回答は44%、また、「わからない」が13%となっていた。

栄養士が働いている姿をみた経験が「ある」と回答した74名を対象として、それはどの様なところだったか複数回答で尋ねた。延べ123件の回答があり、「学校などの給食室」がもっとも高く、「病院などの栄養相談室」、「学校の教室」、「テレビの教育番組」および「テレビドラマなど」が10%以上となっていた(図2)。

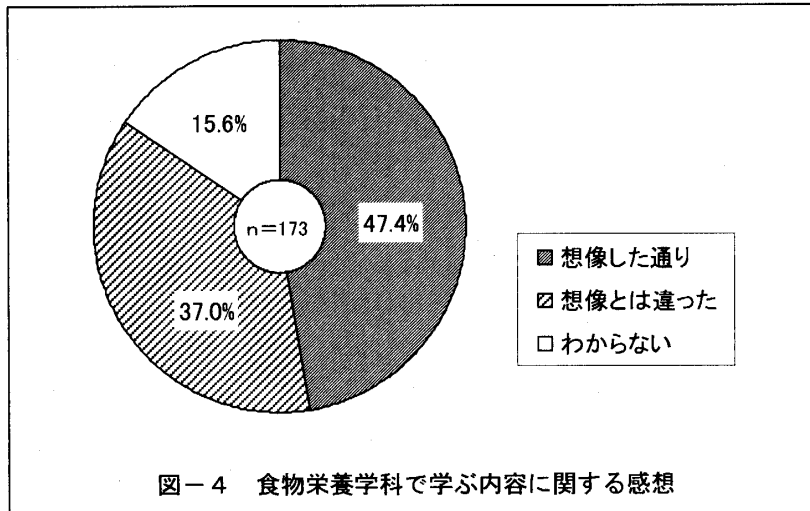


3 模擬授業への参加について

模擬授業に参加したことより『栄養士』に対するイメージが変わったかという設問に、「変わった」という回答が「変わらない」を上回った。しかし、「どちらとも言えない」という回答も30%程度認められた(図3)。



模擬授業では、栄養士養成における教育内容の一部として『栄養指導実習』を紹介したが、学ぶ内容が模擬授業以前に「想像した通り」という回答は「想像とは違った」を上回った（図4）。



紹介した『栄養指導実習』という科目に対する感想では、7割の高校生が「面白そう」と回答したのに対して「つまらなそう」という回答は1名に止まっていた。しかし、30%は「わからない」と回答した。

今回模擬授業で『集団栄養食事指導』を体験し、自分も栄養指導をやってみたいと「思った」という回答は72%で、「思わなかった」の6%を圧倒的に上回っていた。しかし、「わからない」という回答も20%を超えていた。

4 栄養士が働く姿をみた経験の影響について

これまでに栄養士が働く姿をみた経験と模擬授業参加による栄養士イメージの変化との相関では、栄養士イメージが『変わった』という回答には経験の有無による差が認められなかった。しかし、『変わらない』という回答では、経験が「ある」は38%、「ない」は27%および「わからない」は22%と、働く栄養士をみた経験による影響が窺われた。

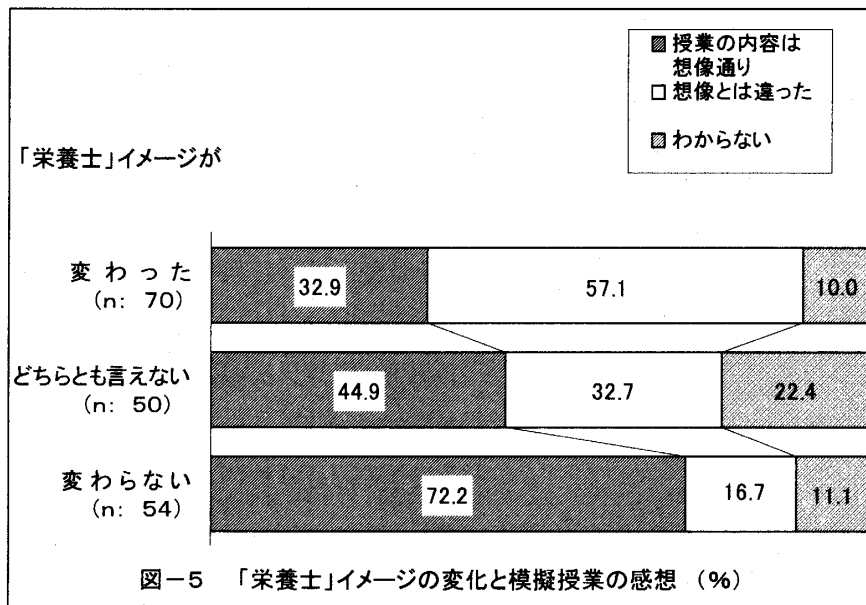
これまでに栄養士が働く姿をみた経験と模擬授業で体験した教育内容の一部に対する感想との相関では、授業の内容が『予想通り』という回答から『予想とは違った』を差し引いて比較したところ、経験が「ある」では19ポイント、「ない」では5ポイント、「わからない」では差を認めず、働く栄養士をみた経験が「ある」高校生に予想と体験との乖離が少ない傾向が示された。

栄養士が働く姿をみた経験と栄養指導実習という科目に対する感想との相関では、経験の有無によって栄養指導実習を『面白そう』と感じた割合には差が認められなかった。

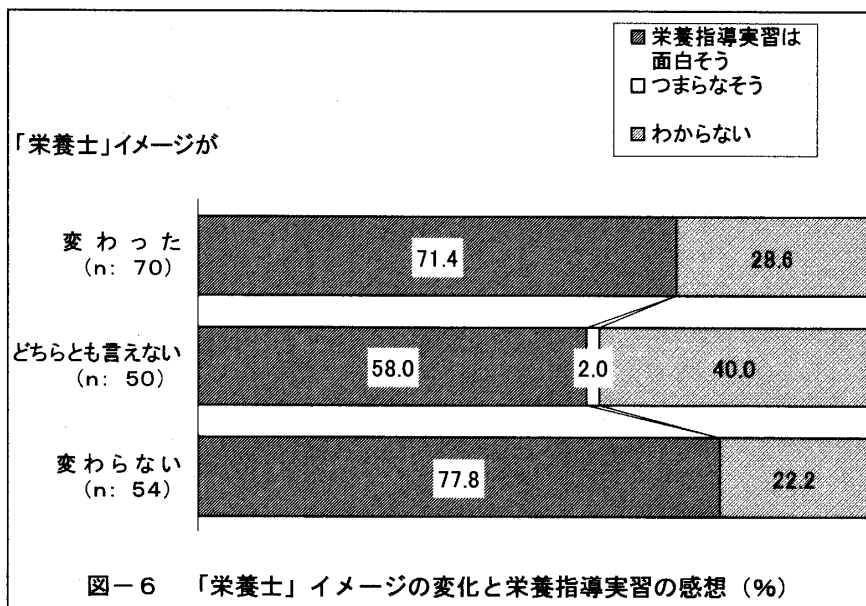
栄養士が働く姿をみた経験と栄養指導に対する興味との相関では、経験の有無によって栄養指導をやってみたいと『思った』割合には差が認められなかった。しかし、『思わない』という割合は、働く姿をみたことが「ある」では4%、「ない」では5%と差は認められなかったが、「わからない」では13%と若干高くなっていた。

5 栄養士イメージ変化の影響について

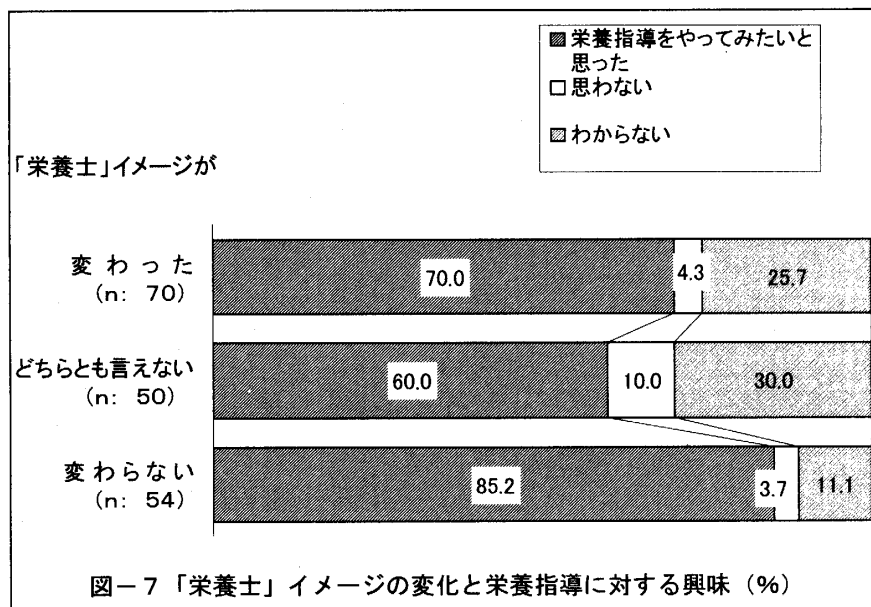
模擬授業に参加したことによる栄養士イメージの変化と模擬授業で体験した教育内容の一部に対する感想との相関では、授業の内容が『想像通り』という割合は、栄養士イメージが「変わった」高校生では30%程度に止まったが、「変わらない」では70%を超え著しい格差 ($p < 0.01$) を認めた (図5)。



栄養士イメージの変化と模擬授業で体験した栄養指導実習に対する感想との相関では、栄養指導実習が『面白そう』という割合は、栄養士イメージが「変わった」および「変わらない」では70%を超えたが、「どちらとも言えない」グループでは若干その割合は低くなっていた (図6)。

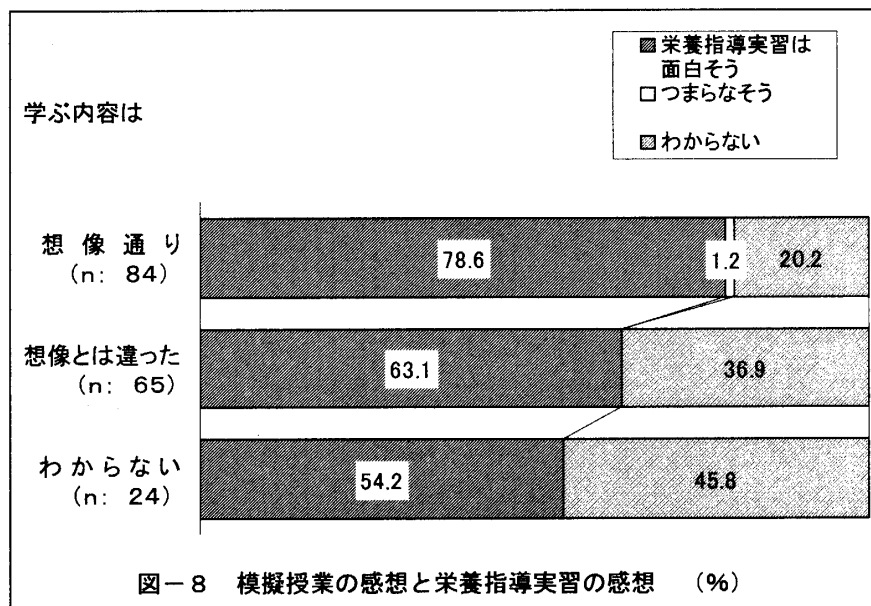


栄養士イメージの変化と体験した栄養指導に対する興味との相関では、栄養指導をやってみたいと『思った』という回答は、栄養士イメージが「変わった」、「どちらとも言えない」および「変わらない」の間に相当程度の差を認めた。一方、栄養指導をやってみたいとは『思わない』割合は、栄養士イメージが「変わった」および「変わらない」には差がなく、「どちらとも言えない」では若干高くなっていた（図7）。

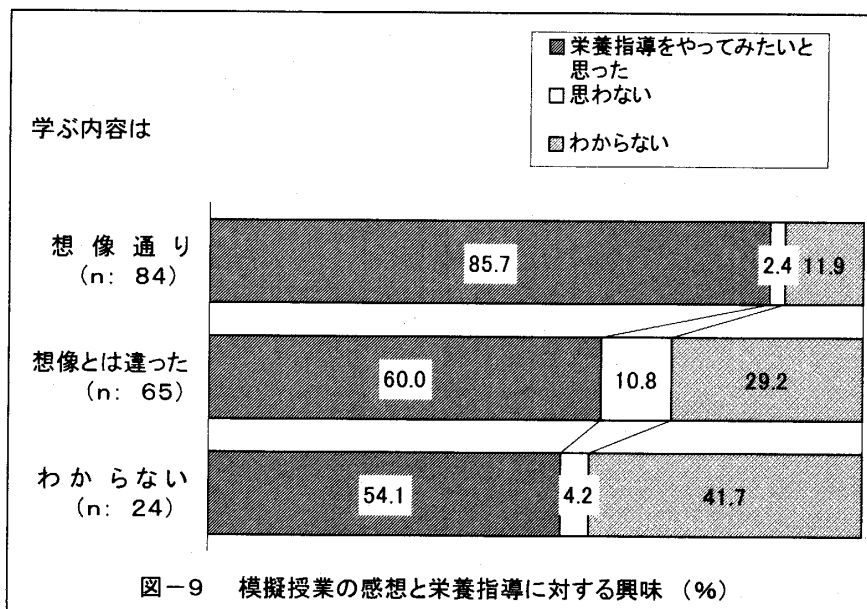


6 教育内容の一部に対する感想の影響について

模擬授業で体験した教育内容の一部に対する感想と「栄養指導実習」に対する感想との相関では、栄養指導実習が『面白そう』という割合は授業の内容が「想像通り」、「想像とは違った」および「わからない」の間に差が認められ、授業内容の理解が進んでいる高校生の方に「栄養指導実習」に対する強い期待が窺われた（図8）。

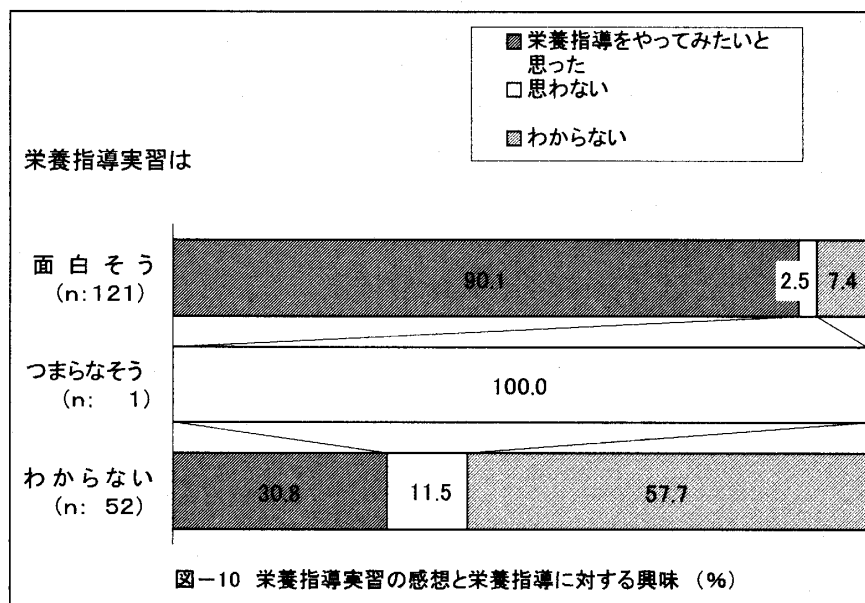


同様に、教育内容の一部に対する感想と栄養指導に対する興味との相関では、栄養指導をやってみたいと『思った』という割合は、授業内容の理解が進んでいる高校生に栄養指導に対する強い興味が見られた。また、栄養指導をやってみたいとは『思わない』という割合では、「想像通り」と「想像とは違った」との間に著しい格差 ($p < 0.01$) が認められた (図9)。



7 「栄養指導実習」に対する感想と栄養指導に対する興味について

今回体験した「栄養指導実習」に対する感想と栄養指導に対する興味との相関では、栄養指導をやってみたいと『思った』という割合は、栄養指導実習が「面白そう」というグループでは90%であったが、「わからない」では30%程度に止まった。また、やってみたいとは『思わない』割合は、栄養指導実習が「面白そう」の3%に対し「わからない」では12%と著しい格差 ($p < 0.01$) が認められた (図10)。

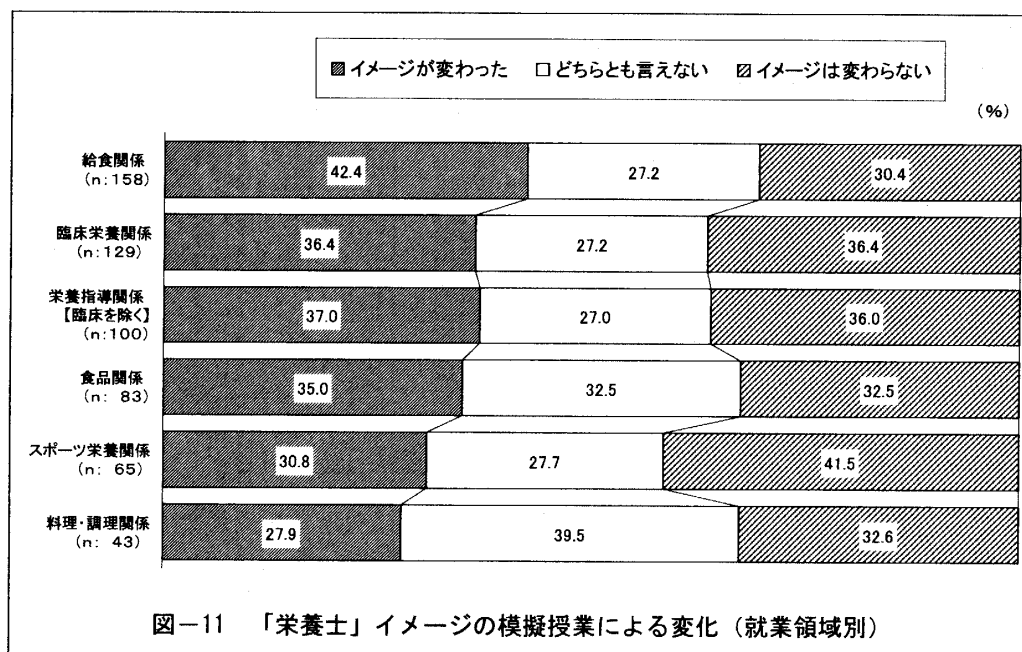


8 就業領域の影響について

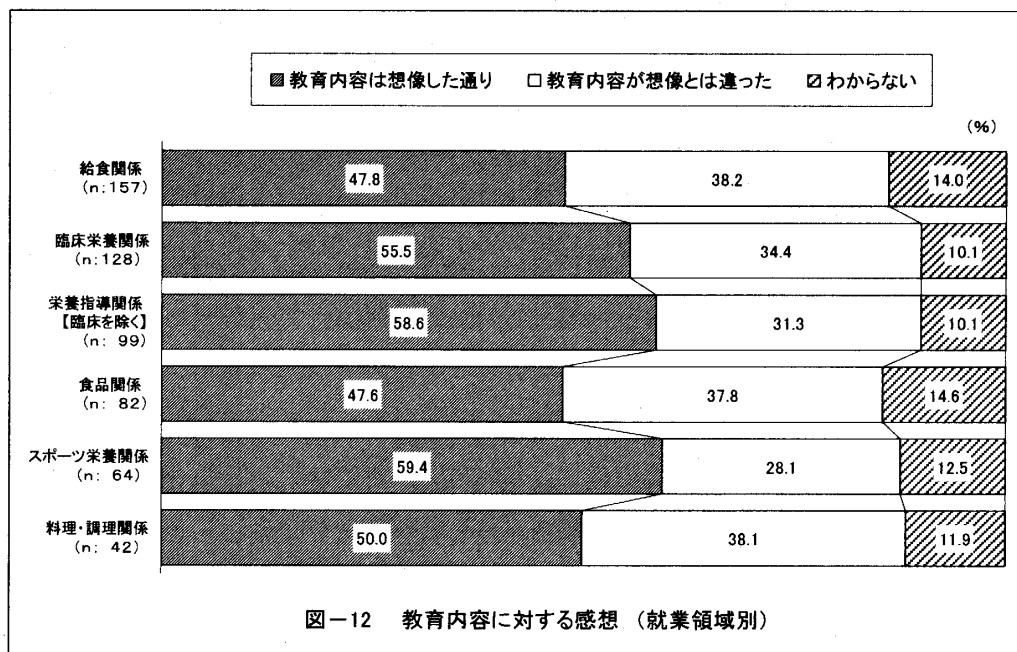
模擬授業参加前の「栄養士」イメージに関する設問の選択肢を就業領域に着目して以下のように分類した（選択は「複数回答」）。

- i 給食関係 ————— 「学校などの給食」
- ii 臨床栄養関係 ————— 「病人の食事指導」
- iii 栄養指導関係 ————— 「母や子の保健指導」、「児童・生徒の『食育』」
 (臨床を除く) ————— 「成人の健康増進」、「高齢者の介護・指導」
- iv 食品関係 ————— 「食品の研究・開発」、「食品の製造・販売」
- v スポーツ栄養関係 ————— 「運動選手の食事管理」
- vi 料理・調理関係 ————— 「飲食店などの調理」、「料理の先生」
 ————— 「料理が上手な母親」

この就業領域別に、模擬授業に参加したことによる「栄養士」イメージの変化について比較を行った。『イメージが変わった』と回答した割合がもっとも高かったのは「給食関係」であった。以下「栄養指導関係（臨床を除く）」、「臨床栄養関係」および「食品関係」と続き、「料理・調理関係」がもっとも低くなっていた。一方、『イメージは変わらない』でもっとも割合が高かったのは「スポーツ栄養関係」、次いで「臨床栄養関係」と「栄養指導関係（臨床を除く）」が続き、もっとも低くなっていたのは「給食関係」であった（図-11）。



同様に、就業領域別に教育内容の一部に対する感想の比較を行った。教育内容が『想像通り』と回答した割合がもっとも高かったのは「スポーツ栄養関係」で、次いで「栄養指導関係（臨床を除く）」、「臨床栄養関係」と続き、もっとも低かったのは「食品関係」と「給食関係」であった。一方、教育内容が『想像とは違った』という回答割合が高かったのは「給食関係」、「料理・調理関係」並びに「食品関係」であった（図-12）。



IV 考察

この2年間の模擬授業「栄養指導実習」に参加した高校生は、各回平均22名で付き添いの父母などを含めると35名程度となっていた。通常のクラス単位の授業に比べ若干少人数ではあったが、栄養士役を努めた学生にとっては適当な受講者数であったと思われる。

1 高校生の『栄養士』イメージについて

模擬授業受講前の高校生が抱いていた『栄養士』イメージで、回答率がもっとも高かったのは「学校などの給食」で90%を超え、次いで「病人の食事指導」が75%であった。この二つだけが50%を超え、「給食管理者としての栄養士」および「傷病者の栄養指導担当者としての栄養士」に対する認識の高い状況が示された。「給食管理者としての栄養士」は、食物栄養学を主体に取り扱う従来型の栄養士像であるといえる。一方、「傷病者の栄養指導担当者としての栄養士」は、人間栄養学を主体に取り扱う未来型の栄養士像であると考えられる。学校給食などを経験してきた高校生に従来型の栄養士像が広く認識されている状況は容易に理解できる。しかし、未来型の栄養士像に関する認識の高さは予想を超え、進路の選択に当たって栄養士の仕事についての情報収集や学習が進んだ、我々が期待する高校生が模擬授業を受講している状況が窺われた。

特に、児童・生徒の『食育』の推進を目指して栄養教諭制度が平成17年4月1日に施行され、また、平成17年6月10日には『食育基本法』が制定されるなど、体制の整備が行われている「児童・生徒の『食育』」がすでに37%の高校生に認識されていた。『食育』をこれからの栄養士の重要な仕事と理解する傾向は、本学が今年度新たに設置した栄養教諭免許状取得のための教職課程を約7割の一年生が受講していることにも見受けられる。「高齢者の介護・指導」や「運動選手の食事管理」などとも相まって、人間栄養学を主体に取り扱う未来型の栄養士像に対する認識が、食物栄養学科を志望する高校生に次第に浸透しているものと考えられる。

2 『栄養士』実態の理解について

医師、看護師および教員など資格職種を志望する高校生は、それぞれ実際に触れ合った経験が動機となっていることが多い。ところが、模擬授業を受講した栄養士志望の高校生では、これまでに栄養士が働く姿をみた経験が「ある」は40%程度に止まり、60%近くが「ない」あるいは「わからない」と回答している。最新の情報に基づく未来型の栄養士像には夢を描けるが、活躍する栄養士の実像に憧れてといった側面が脆弱である。そのことは、就職活動にも大きく影響しているように思われる。昨年度就職した卒業生の約7割が栄養士免許を活用していたが、栄養士職での就職を考えている学生に自分になりたいと考える栄養士像と、社会が期待する栄養士像との間に相当程度の乖離が見受けられ、就職先を決めるときの決断が遅くない易い傾向があるように思われる。

栄養士が働いている姿をみたところ（施設）では、「学校などの給食室」が70%を超えるなど「給食の栄養士」という印象が強い。特に、栄養士のイメージで「病人の食事指導」を75%の高校生が上げたが、実際に「病院などの栄養相談室」において働く栄養士の姿をみたことがあると回答したのは16人（受講生の9%）だけである。大多数の高校生が、多様な情報に基づく栄養士のイメージは描けていても、その実態についてはほとんど理解されていないものと思われる。オープンキャンパスなどに参加しない学生では、二年生の夏期休暇中の給食実務校外実習において、現場の栄養士から直接指導を受けるまでこのような状態が続くことになる。給食実務校外実習を経験することによって『栄養士』実態の理解は大幅に進展する。しかし、入学前のオープンキャンパスなどで早期に栄養士業務の実際を紹介することは、高校生が『栄養士』の実態を理解することを支援するとともに、適切な進路選択にも寄与するものとする。

3 模擬授業の評価について

模擬授業を受けることによって栄養士に対するイメージが「変わった」高校生は、「変わらない」を10ポイント程度上回った。「変わった」方を是とするのか「変わらない」方を是とするのかの判断は難しい。例えば、栄養士業務の実際が理解されている高校生では「変わらない」方が良く、給食栄養士との認識に止まっている高校生では「変わった」方が良くからである。ここで問題にしなければいけないことは、約30%存在した「どちらとも言えない」という回答である。良い状態の維持または良い方向への意識の変容を目指して、高校生に模擬授業の内容が十分に理解・活用されたか、また、期待する内容となっていたかなど今後検討する必要がある。

入学後の教育内容の一部として栄養指導実習を紹介したが、受講者の約50%はその内容を「想像した通り」と回答し、授業についての理解が深まっている高校生の存在が窺われた。一方、約40%は「想像とは違った」と回答している。高校生やその父母、高校の担任などに食物栄養学科は、調理・料理またパンやケーキを専門的に教育するところという思い込みが残っているようだ。栄養士と調理師または製菓衛生師との混同である。このようなケースでは、「想像とは違った」と認識されることに期待を持ちたいものである。

模擬授業で紹介した栄養指導実習を約70%が「面白そう」と回答し、「つまらなそう」と回答

したのは1名だけで、多くの高校生に好意を持って受け入れられたようである。また、自分も栄養指導をやってみたいと「思った」という回答は70%以上で、栄養指導実習は高校生の興味を引くものであったと考え、オープンキャンパスの模擬授業に十分耐え得る科目・内容であることを確信した。

4 栄養士が働く姿をみた経験の影響について

これまでに栄養士が働く姿をみた経験の有無と栄養士イメージの変化との相関で、経験が「ある」グループに栄養士イメージが『変わらない』傾向を認めた。栄養士の実像を見る経験には、栄養士の理解を支援する効果が期待できる。そのような観点から高校生に、学生によるシミュレーションではあっても栄養指導を経験させることには意義がある。

同様に教育内容に対する感想との相関では、経験が「ある」グループに模擬授業の内容を『想像した通り』と回答する傾向が認められ、このグループに事前の予想と実際の模擬授業との乖離が少ないことが窺われた。

一方、栄養指導実習を『面白そう』、また、栄養指導をやってみたいと『思った』という回答には、栄養士が働く姿をみた経験の有無による大きな格差は認められなかった。模擬授業への参加は、栄養士と触れ合ったことがない高校生であっても、栄養指導実習や栄養指導への関心や興味を引き出す効果があるものと思われる。しかし、働く姿をみたかどうか「わからない」と回答したグループに、栄養指導をやってみたいとは『思わない』高校生の存在が高率に認められた。このような高校生には、今回の模擬授業への参加が適切な進路の選択に寄与できるものと思慮される。

5 栄養士イメージ変化の影響について

模擬授業参加による栄養士イメージの変化と教育内容に対する感想との相関では、栄養士イメージが「変わった」グループは模擬授業の内容が『想像とは違った』が約60%であったのに対し、「変わらない」グループは『想像した通り』と70%以上が回答するなど著しい格差を認めた。この結果は、栄養指導実習に対する感想や栄養指導への興味などとも相まって、模擬授業の内容が『想像とは違った』ので栄養士イメージが「変わった」、また、『想像した通り』であったので栄養士イメージは「変わらない」と理解することが可能である。特に、「変わった」グループに属する高校生に対しては、今回のような模擬授業の効果が期待できると考える。

栄養士イメージの変化と栄養指導実習に対する感想との相関では、栄養指導実習を『面白そう』という回答は、栄養士イメージが「変わった」より「変わらない」グループの方が若干高くなっていたが差は6ポイント程度であった。しかし、「どちらとも言えない」グループでは20ポイント下回り、このグループに属する高校生の意識の変容を如何に図っていくかが今後の課題であろう。

同様に栄養指導への興味との相関では、栄養指導をやってみたいと『思った』という回答は、栄養士イメージが「変わった」より「変わらない」方が15ポイント高くなっていたが、「変わっ

た」でも70%の高率で栄養指導への興味の強さが窺われた。一方、栄養指導をやってみたいとは思わないが、「変わった」および「変わらない」グループで4%程度、「どちらとも言えない」では10%認められた。栄養指導に興味を持たないこれらの高校生には、入学後に意識、態度・行動の変容が認められないとは断言できないが、適切な進路の選択をこの段階で行うことが望ましいと感じられた。

6 教育内容に対する感想の影響について

模擬授業で体験した教育内容の一部および栄養指導実習に対する感想との相関では、栄養指導実習を『面白そう』という回答は、教育内容が「想像とは違った」より「想像した通り」の方が15ポイント上回り、このグループに好意的に受け入れられている。しかし、想像した通りか想像とは違ったか「わからない」グループでは、50%を少し超えた程度に止まった。この「わからない」グループに属する高校生は、入学後に受ける授業内容などに対する理解が滞っているものと推測される。

同様に栄養指導への興味との相関では、教育内容の一部に対する感想と同様の傾向が認められた。これら高校生には、オープンキャンパスなどの機会を活用して入学後の学習内容などをしっかり理解させ、ケースによっては適切な進路の選択を提案していくことも必要であろう。

7 栄養指導実習と栄養指導に対する興味について

模擬授業で体験した栄養指導実習と栄養指導に対する興味との相関では、栄養指導をやってみたいと『思った』という回答は、栄養指導実習が「面白そう」グループでは90%を超えた。「つまらなそう」は1名で栄養指導をやってみたいとは思わないと回答しており、食物栄養学科の教育内容に馴染むことが非常に難しいと思慮されるので、このような高校生に進路選択の判断材料を提供する良い機会となったものと考えられる。

一方、栄養指導実習が面白そうかつつまらなそうか「わからない」グループでは、栄養指導をやってみたいと『思った』高校生が31%、『思わない』が12%、また、残りの60%弱が「わからない」と回答している。このグループには、入学後に受ける教育内容をしっかり理解させる説明の必要性を感じる。

8 栄養士イメージの就業領域による影響について

模擬授業受講前の栄養士イメージが受講によって変化した様子を就業領域別に比較したところ、「給食関係」をイメージしていた高校生の『変わった』割合がもっとも高く、また、『変わらない』割合がもっとも低くなっていた。給食関係をイメージしていた高校生の多くが、模擬的に紹介した糖尿病集団栄養食事指導を体験したことによって、これまで外見からは窺い知れなかった栄養士の本来業務が栄養指導であるということの理解を深める効果があったものと考えられる。

次いで『変わった』割合が高かったのは、「栄養指導関係（臨床を除く）」、「臨床栄養関係」であった。一方、『変わらない』という割合も相対的に高くなっていた。この2領域を上げた高校生

は、病院、保健所および保健センターなどにおける実際の栄養指導の体験に基づいた理解による場合にはイメージは『変わらない』となり、マスコミ、高校における進路指導および学校案内や情報誌などからの知識によって、栄養士が栄養指導を行うことを知っていた場合には実際に展開されている栄養指導を模擬的に経験したことで、医療専門職としての栄養士イメージの理解が深まったことにより『変わった』と感じ、結果として高校生の回答が割れたものと思われる。

「スポーツ栄養関係」をイメージしていた高校生では、『変わった』割合より『変わらない』割合の方が唯一11ポイント高くなっていた。スポーツ栄養に対する関心は、アテネオリンピックにおいて選手の栄養支援チームに加わった栄養士の活躍が、マスコミなどで紹介されたことを受けて高まっている。この領域における栄養士業務については、関心を寄せる高校生の理解が進んでいる状況が窺われる。

「食品関係」と「料理・調理関係」をイメージしている高校生では、『どちらとも言えない』という割合が他の領域に比べ5ポイントおよび12ポイント高くなっていた。栄養士という職種に関するイメージが確立していないため、『変わった』とも『変わらない』ともいえない思考途中の状況が窺われ、進路の決定には食物栄養学科への適性をしっかり判断されることが望まれる。

9 教育内容に対する感想の就業領域による影響について

教育内容の一部を紹介した模擬授業に対する感想で、教育内容は『想像した通り』とする領域が50%以下の3領域とそれ以上の3領域に二分された。50%以下となったのは「食品関係」、「給食関係」および「料理・調理関係」で、また、教育内容が『想像とは違った』という割合が相対的に高くなっていた。これらの3領域は、いずれも食物の栄養を主体的に取り扱うイメージが強い領域である。これに対して人間の栄養を主体的に取り扱うイメージが強い「スポーツ栄養関係」、「臨床栄養」および「栄養指導（臨床を除く）」では、『想像した通り』が56%を超え、また、『想像とは違った』が相対的に低くなっていた。

模擬授業は、一部ではあるが入学後の教育内容を紹介するものである。全体としても受講者の3～4割程度に、『想像とは違った』という戸惑いを感じられる。特に、栄養士イメージとして食物の栄養を主体的に取り扱う領域を上げた高校生にその傾向が強く、入学後の混乱を防止するためにもオープンキャンパス等の機会を活用した、事前の十分な情報の提供と進路指導が強く求められる。

《 要 約 》

オープンキャンパス時の模擬授業を受講した高校生を対象に、実施した模擬授業の自己評価とともに栄養士イメージの変化などについて検討を試みた。

今回の模擬授業で取り上げた科目「栄養指導実習」には、高校生から期待以上の高い関心が寄せられた。また、学生が模擬的に実施した「糖尿病集団栄養食事指導」にも強い興味を示されるなど、当該科目が入学後の教育内容の一部を紹介するものとして、十分高校生の期待に応え得るものであることを確認した。

一方、模擬授業への参加により高校生の抱く栄養士観が、食物の栄養を主体的に取り扱う「給食栄養士」的なイメージから、栄養士業務の根幹を成す人間の栄養を取り扱う「栄養指導栄養士」的なイメージへの変化が窺われた。また、両栄養士観の間に「教育内容」や「栄養指導実習」という科目に対する感想や、「栄養指導」に対する興味に格差が認められた。栄養士養成施設でもある食物栄養学科を志望する高校生には、オープンキャンパスなどの機会を活用した十分な情報の提供と進路指導の必要性を認めた。

《キーワード》

模擬授業、栄養指導実習、栄養指導、栄養士イメージ、栄養士養成